

視_点

段ボールベッド

レンゴー会長兼社長

大坪 清



4月14日の前震、そして16日の本震と、熊本地方を中心として発生した大地震のニュース映像に胸を痛められた方も多いと思う。被災された皆さまには心からお見舞いを申しあげたい。

このたびの熊本地震では、車中泊などによるエコノミークラス症候群に起因する死亡事例が話題となったが、その予防策として、段ボールベッドが注目を集めたことはご存じだろうか。

今回、被災地への段ボールベッドの供給については、段ボール産業の全国組織である全国段ボール工業組合連合会が先頭に立ち、段ボール産業が一丸となって取り組

んだ初の事例となった。

地震発生当初、段ボールベッドを真っ先に避難所にお届けしたところ、売り込みと誤解されたこともあったが、結果的に5千台以上のベッドを届けることができ、その有効性が理解され、今では大変感謝されている。

段ボールベッドは東日本大震災時、避難所で医療に携わった医師らの切実なニーズから生まれたものだ。避難所などでの雑魚寝生活は心身へのストレスが大きく、車中泊と並んで、エコノミークラス症候群の発生リスクも高まる。特にお年寄りや女性は、大勢での共同生活においてトイレの回数を減

らすために水分を控える傾向がある。それに加え、床面での寝起きが連続と、どうしても立ち上がるのがおっくうになり運動不足となる。動かなくなることで歩行機能も低下し、エコノミークラス症候群の原因となる足の静脈での血栓発生のリスクも高まるというわけである。

また、床面に近ければ近いほど、粉じん吸入による咳や呼吸機能低下の恐れがあるほか、床面からは振動も伝わりやすく不眠による血圧上昇も生じやすい。

段ボールベッドは高さが35センチメートルあるため、立ち上がりやすくなり、粉じん対策としても有効である。実際に、利用された方々からは、立ち上がりやすくなった、よく寝れるようになった、気持ちが悪くなった、鼻水や咳が減った、布団の湿気が減った、といった声が寄せられている。

段ボールは地域密着型の産業であり、全国に生産工場が分散して

いる。広域の自然災害にも近隣地域にて直ちに代替生産、輸送が可能である。そのために段ボールベッドの仕様を共通にし、いずれのメーカーからも供給可能な体制をつくり、いざという時に備えている。現在では全国の自治体との間で、段ボールベッドの供給に関する防災協定の締結も進んでいる。また、国の防災基本計画においても、2012年9月の改定で避難所での簡易ベッド整備に努める旨が明記された。

段ボール産業界では、段ボールベッドの普及ならびに啓発を、段ボールだからこそできる社会貢献の一環ととらえ、段ボールの持つ温かみと優しさが、災害時、避難を余儀なくされる皆さまの健康と安全・安心に少しでもお役にたてるよう、今後とも力を注いでいく所存である。

被災地の皆さまの、1日も早い復旧と復興をお祈りしたい。

K